

# 浄土

1981-4

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行  
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授受認許証) 第三二五号  
昭和五十六年三月二十五日印刷  
第四十七卷  
第四号



## 受験生

今年の受験シーズンも、ほぼ終りを迎える  
昨今ではありますが、大正大学も三月十三、十  
四日の仏教学部、編入、大学院の入学試験を  
以て本年の入学試験を終ります。既に文学部  
の入学試験は三月一日、二日に終わりました。



世間では本年は志願者が減少していると言  
っておりますが、ここ大正大学では去年より増  
加しているのが現状です。

筆者は丁度三月一日夜の当直にあたりまし  
たので、二日の面接日は朝八時から校門に立  
って、やって来る受験生のチェックを致しま  
した。受験生の中には他の大学と併願してい  
て、前日あたりの合格発表で来なくなる人、  
又、一日目のペーパーテストで自分から諦め  
て来ない人など様々ありますが、それでも八  
割方の受験生はやって来ます。八時前から校  
門前に立って開門を待っている受験生も居り  
ますが、大方の受験生は入校時眼前の十五分  
間に集中します。カウンターを持って数を調  
べている係員の手が忙しく動くのもその頃で  
す。

しかし、時限の九時十五分を過ぎ九時半に  
なろうとしているのに、慌てる様子もなくゆ  
っくり入門して来る受験生がおります。係員  
が「急いで下さい」と注意しても、慌てる様  
子もなく悠々としているのです。見ている当  
方の方があせって来ます。門衛の人の話では  
試験日が終わってから来る呑気な受験生も毎年

いるとのこと。この様な受験生は、自分  
から積極的に受験して入学してやろうという  
気持ちがないのでしょうか。面接試験でも拒否  
点をつけられるような悪い態度の受験生も時  
々あります。個々のそれなりの理由もあるの  
でしょうが、ただ、この様な態度の受験生の  
数が年々増加している様に感じられるので  
す。

単に普通高校を増やし、知的好奇心もない  
生徒まで大学に送り込むような高等学校教育  
そのものを、又、高等学校以上の高等教育そ  
のものを真剣に考え直す時が来ているように  
思われます。大学進学が自分達にとってどう  
いう意味を持つのか。安易な功利主義だけ  
で、又、曖昧に四年間を過ごす場所を求めて  
進学する様では何の意味も持たないでしょ  
う。大学進学を選ぶ以上は充分にその意義を  
自覚し、究極的に学問が人間にどのような関  
りを持つかを探究して欲しいと願い、学問を  
通して人間自身が何であるかを正しく認識  
し、これからの人類の生き方を追求して行く  
気概を持って欲しいと願いながら、受験生達  
を眺めたことでした。

(佐藤行信)

# 四月号



まさに知るべし、念仏はかくのごとき等の現当二世、始終の両益あり。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集 1 P.154)

## 目次

### 法話

唯我独尊のころ

一花まつりに寄せて……………小 俣 昌 雄……(2)

宗祖生誕を祝う気持……………村 瀬 秀 雄……(6)

〈随想〉ほとけとの出会い(十一)……………佐 竹 隆 三……(12)

### 寄稿

一枚起請文のころ……………松 島 定 宣……(16)

■随想■ タロ、再び

一伊豆高原徒然草より……………木 下 隆 一……(21)

落ちこぼれ 一青春の符……………川 村 悠 穂……(26)

現代社会と浄土教……………上 野 浩……(34)

浄土句集……………一 田 牛 献 選……(30)

〈表紙のことば〉パンジーと貝殻……………土 屋 正 男……(32)

〈表紙裏・巻頭言〉受験生……………佐 藤 行 信

念仏ひじり三国志⑧——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部

## 法 話



# 唯我独尊のこころ

——花まつりに寄せて——

小 侯 昌 雄  
お また しゅう おう

(東京・戸越行慶寺住職)

四月八日の「花まつり」は御承知の様に釈尊の生誕を讃える集いですが、昔から仏生会とか灌仏会かんぶつゑと言って、仏教徒にとって大切な行事となっています。

釈尊は西暦前五六〇年頃、その当時沢山の小さい都市国家に分かれていた北インドのカピラヴァストの首長であるスドウダナ王とマヤー夫人のお子として、マヤー夫人の実家のあるデーヴァダハの近くに在るルンビニという御苑でお生れになりました。お名前をシッダールタといっています。

この釈尊生誕の地は、現在のネパール南部のインドに近いタライ地方のルンミンディ村に在って、そこには釈

尊滅後二百年頃にインドをほぼ統一したマカダ圏のアシカ王が釈尊の生誕を讃えて建てた石柱が半分に折れ乍らも今に猶残っています。最近記念公園として整備されつつあります。

さて仏伝によりますと、釈尊はお生れになると天地を指して「天上天下唯我独尊」と宣べられたと伝えていますが、花まつりの花御堂に安置する可愛らしい誕生仏はその時の姿をあらわしたものです。

この伝えについて渡辺照宏先生は「新釈尊伝」の中で、「ボサツは太子として誕生すると先ずその天眼によつ

て四方を觀察し……持戒と禪定と智慧と善根などの点で自分だけの境地に達しているものが一人もいないことをはっきり知ります。「天上天下唯我独尊」というのはこの意味です」

と解説して居ります。

釈尊は二十九歳の時に出家し、厳しいひたむきな修行と求道の末とはいえ、勤苦六年にして正覺を成就したのですから、確かに生れつき世に超えてすぐれた資質を具えていらつしやうに違いありません。

そのためにいろいろの前生譚が語られ、前世のボサツがその梵行を成就するために釈尊としてこの世に生を受けたのであり、過去の永い間の善い因縁が熟してこのように優れた資質を生れ乍らにして具えているのであるとその必然性を説明しています。

この生誕の時の言葉は、釈尊の偉大さを伝えようとする人々の心から出たものでありましようが、これはまた釈尊自身の一切の人々の業苦を解きはなすための導き手としては、自分を措いて他にないという救済への覺悟を汲みとったものといえましよう。

ところで、この唯我独尊という言葉については、漢訳のこの文字の上からのことではありますが、もうひとつ別の読みとり方が出来るのです。

それは「どんな人でも独立した人格をも尊い存在である」という受けとめ方です。「唯だ我とは独りにして尊し」と読むのです。

この読み方は、釈尊がお説きになった仏教の心に適うものがあると思うのですが如何でしょう。その点についてこれから少し考えてみることにします。

(一) 釈尊の時代は既に社会の階層化が進んでいて、自由に自分の意見を言い行動出来るのは限られた人たちでした。その点、釈尊は御自身が上層階級の王族の出身でありましたから、出家成道の後も御自身の自覺し給うところを語ることが出来、社会への伝道を行うことも容易だったかも知れません。

しかし釈尊は仏教を凡べての階層の人たちのものとし、たとえ奴隸出身の者でも仏道を志して出家した者は差別されることなく、王侯といえどもこれを供養し敬礼するようにと教えて居られます。釈尊にとってはその出身や能力の多少は本質的なことではなかったといえま

す。仏道に於いて平等なのです。

(二) 釈尊は凡ては縁起(因と縁)によって成ると説いて居りますが、この世の中はある特定の意志によって作られるものではなく、多くの人たちのいろいろな意志や行為が良きにつけ悪しきにつけ互に影響し合いながら織りなされてゆくものであるということです。世の中を良くするも悪くするもどんな人でも片棒かついているのですから、だからこそ一人ひとりの仏法による自覚が大切になるのです。

(三) 吉野は桜の名所ですが、あの一目千本の美しさは、小さなあの可憐な花たちのものです。同じ樹でも南向きと日陰の枝とでは花の出色が違うでしょうし、老樹と若木のそれも趣が違います。些細にみればその時の花の状態は皆違ふともいえましょうが、そのいづれの花もが、その時その所において己れのいのちを精一杯にはたらかせているところにあの美しさがあります。その一輪の花に吉野の美しさを支える価値を見るところに仏教の心があるはずで。

この様に人間のみならず一輪の花にもそれぞれにかけがいのない価値をみることが釈尊の心なのですから、い

ま唯我独尊という言葉をみるに、それは期せずして釈尊の真意をあらわしていることになります。

さて最近学内暴力や家庭内暴力が問題になっていますが、所謂学歴社会の中で、こどもたちは友達と友情を育てることを忘れて塾通いにあけくれ、いつも気持ちの上で追われるような生活をしているのですから、うっせきした感情が事件を起すことになるのです。

能力中心に人間を評価することは一番手取り早い評価の仕方です。例えば運動会でカケッコをすれば一等の子がありビリの子が出来ます。いくら絵が上手でも歌が下手ではノド自慢には入選出来ません。

他人より優れるということは確かにうれしいことです。が、これは本来相対的な事柄ですから、一等で得意の子も更に早く走る子の前では三等にも四等にもなってしまう。それに王選手の引退にみるように、いかに優れた能力もやがて衰える時が来るものです。

優れていることだけに価値を見ることが偏った危険な考えです。

今年には国際障害者年ですから、それぞれの機関でこのことが取りあげられています。NHKテレビでも毎週金曜日の午前八時半からこの問題について放映していますので御覧になっている方も多いことでしょう。

最近には特に公害や薬害のために身心に障害を受けて生れることもや、交通事故等による重度の障害者が非常に多く、その治療施設の不充分さと共に社会的に問題となっていることは御承知の通りです。

いま私の机の上に「目の見えぬ子ら」と「音から隔てられて」という二冊の本があります。視力と聴力を失った人たちが現実どんな困難に出会い、それを克服して如何に懸命に生きているか、その人たちにどのような理解と介助が必要かを訴えています。

この世の中は健康な優れた人だけのものではありません。そこには当然ながら老人も幼児も、そして病人も狂人もいます。

大人の病氣は多くは本人の不摂生によるとはいえ、自分から好んで狂ったり病氣になる人はいないはずで、多くの場合そこにはやはりそれなりの事情があるものです。それに誰でも何時そういう状態に置かれなとも限

りません。

私も近來難聴で、例えば病院などで順番を待っていても呼ばれたのを聞き漏したり、どうも不自由です。ましては重い傷害を受けた人はどんな思いでしょう。

私たちは旧來の慈善という考えを超えて、釈尊が一人ひとりにかけがいのない貴重な価値を認められた仏教の心をもってこの問題に当るのです。そして考えればハンディキャップをもたぬ人はいないのですから、どんな状態に置かれようと卑下しない精神を佛法によって確立したいと思います。

法然上人は平重衡に「罪深ければとて卑下し給うな」と仰せられています。これは罪を容認したのではなく、そのような人でも仏道を成就し得る資格があり、お念仏を称える人は凡べて賢愚貴賤を問わず平等であるということです。ここにも釈尊の真意が生かされています。

能力だけに価値を置いて、いつも追われるように不安定な心で虚飾の中に生きることを止めて、釈尊の唯我独尊のこころを受けて、自分の持ち味を活かして充実した人生を拓らこうではありませんか。



## 宗祖生誕を祝う氣持

村瀬秀雄  
むら  
せ  
ひで  
お

四月になって一度に桜が開き、菜の花が咲くと、まず念い出すことは四月八日の花祭りである。どの寺でも花御堂を持ち出して、中に天と地とを指さしている可愛らしい誕生仏を小さなたらいの中に立たせてまつる。近所の子供たちは瓶をもって甘茶をもらいにやってくる。釈尊降誕を祝う仏事は季節の花に彩られて華やかでもあるし、

津々浦々に繰り広げられている楽しい年中行事である。それに較べて宗祖上人の生誕を祝う行事は余りにも寂しく、灌仏会の一日前という時期的な関係もあって一向に風物詩になり得る氣配すらみ

せていない。来年は宗祖生誕八五〇年の記念の年であるから、これを好機として祝日を四月ではなくて他の月の七日に定めたならば如何なものであらうかと思っている。

二祖鎮西上人は、わが大師釈尊と仰ぐべき人はただ法然上人一人であるといっている。この言葉は宗祖上人に対する単なる讃辞であると受けとってはならないと思う。そうではなくて二祖上人は身にしみて法然上人こそがわが本師釈尊であると景仰していたに相違ないからである。釈尊は八万四千の法門を明かし給うた仏である。そのお

げでいかなる素質と環境の人であつても、その中から必ず有縁の法門を見出すことができる。宗祖上人は凡夫のために念仏の法門を開き給うた原祖である。凡夫にとっては必ず極楽往生ができる法門が一つあればよいのであつて、その他に幾ら多くの法門があつたにしても高嶺の花に過ぎないのである。釈尊出世の本懐は凡夫に至るまで救われる法門を説くことであつたと説かれているが、この法門を現実に示して教え導き給うた原祖は法然上人である。また釈尊はすべての経道が尽滅することがあつても念仏の法門だけは永遠に弘道させることを阿難に命じ給うた。しかし阿難に代つて具体的にこの法門を広め給うたのは法然上人であつた。このことを思えば二祖上人が釈尊とは宗祖のことであるといった言葉は、真実の信念から迸り出た言葉であつたに相違ない。受け難い人身を今すでに受けていることを思つて生命の貴重さを思い、聞き難き仏法を今ここに聞くことができ幸運さを味うわけであるが、凡夫にとつては念仏の法門に会い得たことを従や疎かに考へてはなら

ぬのである。もしも宗祖上人が生れていなかったら、今の仏教は一体どのようなになっていたか判らない。少なくとも凡夫にとつてこれ程に仏教と有縁であり得たであろうか。念仏を唱えることが当り前のことになっている今だからこそ、宗祖上人生誕を祝う時に當つて改めて思いおこしてみたいのである。

釈尊の伝記作者は見事な構想によつて出胎の相を描いている。釈尊は生れながらにして仏であつたという信念があつたからである。釈尊は出胎と同時に六道の世界を乗り越えて仏の世界に達し、天と地とを指さして衆生救済を宣言し給うた。それに較べてご伝に記されている宗祖上人の記事はまことに簡単であり、何ら普通の子供と変るところがない。上人は美作国久米の南条（岡山県久米郡久米南町）にあつて押領使（地方の治安維持に任ずる）を勤めていた漆間時國の一子として、長承二年（一一三三）四月七日に生れた。時國は土着の豪族として権力を持っていたばかりでなく、先祖は仁明天皇の皇子源の光公であつたという系図の上か

らも可成り幅を利かせていた。たった一つの悩みは妻の秦氏との間に子供に恵まれなかったことである。時國の五代前に当る元國に男の子がいなかったために、京都からきた源の年を迎えて娘の養子にしたことがあったが、時國のように子供が一人もいないとなると武士の家柄も絶えてしまうかも知れなかった。そのために時國夫婦は心を合せて神仏に祈って子宝が恵まれるように願った。その甲斐があつて秦氏は剃刀を呑んだ夢をみて懐妊したことを知った。まさしく神仏の授かり子が得られたわけであつた。時國は妻の懐妊を喜び、生れてくる子は男の子に相違なく、成人してからは多くの人々の戒師になるであらうといった。生れてくる子を祝福し、希望を大きく張らませることは、今も昔も変りがない親心であつて、むしろ微笑ましいことである。一方秦氏についてご伝は次のように記している。

「秦氏その心柔和にして身に苦痛なく、堅く

酒肉五辛を絶ちて、三宝に帰する心深かりけり」

母親にとって妊娠中に心を柔和に保つことが何よりも大切である。怪ったり悩んだりせず、他からも恐ろしい目にあうことのないように配慮してやらぬと、胎児に悪い影響を与えることは必至である。今でも母親は絵画を愛し、音楽を聞く等の美的情操に心を配っている次第である。食事にしても同じことであり、秦氏は酒や肉類を絶ち、にんにく葱等を口にしなかったという。しかも秦氏は篤く仏に帰依したという。仏を拜んで供養を捧げている者が悪い心を起すわけがなく、身に苦痛なく平穩に日々を過したのであるから、その裏には時國の思いやりがあつたことであらう。こうして胎児は明るく正しく育つことができたわけである。ご伝が記している上人ご生誕の模様は次の通りである。

「やがて崇徳天皇の御代、長承二年（一一三三）四月七日の正午近くに、秦氏は苦痛もなく安らかに男の子を分娩した。折から空に紫雲が棚引いていた。館の西方に根元が二つに分れ、こんもり茂った椋の木があったが、どこからともなく二流れの真白い長旗が飛んできて、椋の小枝に垂れ下った。旗の鈴の音が空一ぱいに響きわたり、日に輝く旗が風に靡いて大空に模様を綾なしていた。それから七日が経つと長旗は天に昇って消え去った。これを見たり聞いたりした人々は、不思議に思わぬ者がなかった。その後はこの木をふた旗の椋の木と呼ぶようになった。何年か後にこの木は枯れて倒れてしまったが、跡には芳しい香りがいつまでも残り、めでたい標をとどめていた。この地を法然上人誕生の地として尊んでいた人々が一寺を建立し、誕生寺と名づけた。上人のみ像を安置した御影堂をつくり、念仏道場となったのである」

ここで二流れの長旗というのは、原文には白幡二流とある。すべて幡というのは、そこに仏がましますという標示のことである。上人ご誕生に当たって白幡が飛んできて椋の木にとまったという記事が、せめてもの記述であって有難いことである。經典の記述の中で何か慶ばしいことがあれば必ず天から華が舞い落ちるし、妙音が聞えて芳香が漂うことが述べられている。またこの記述によって法会には華を散じ楽を奏でて香をたくわけである。上人は勢至菩薩の化現として尊ばれたのであるから、生誕に当たっての瑞相があっても不思議であるまい。釈尊は印度に降誕して仏法を樹立し給うた仏であるとすれば、宗祖上人はわが国に生誕して庶民のために念仏の法門を明かし給うた菩薩であった。何れにしてもご生誕慶祝の行事が全国一律に行われるようにしたいものである。



◇◇法然上人ご誕生に寄せて◇◇

## 勢 至 誕 生

久米の佐良山雪消えて

笛吹川の流れぬるむ

あふるるは春の光

山野に満ちたり

聞こゆるはよき楽の音

降るは白き葩はなびら

椋はたけの木に幡はたのかかりて

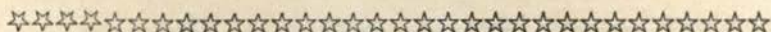
いまこそ勢至あ生れましぬ

高たか  
橋はし  
良りょう  
和わ



諸<sup>もろ</sup>人<sup>びと</sup>のよろこびの声  
稲岡の庄にひびきて  
やわらかき春の風  
菜の花をなでる  
わらべ唄の聞こゆる里  
七彩の雲たなびきて  
産ぶ声のけんをゆする  
いまこそ勢至生れましぬ

注 勢至とは法然上人の幼名、  
勢至丸のことである。



## 〈随想〉

# ほとけとの出会い (十一)

佐 隆 三  
たけ りゅう ぞう  
竹 隆 三

(大正大学教授・医博)

アビダルマ仏教が、「時間」は存在にほかならない」と理解したのでありますが、大乘の唯識仏教になりますと、心不相応行法の中に「時」や「方」を含めているのであります。

「因果相続して流転するを、仮に立てて時となす」という簡潔な表現にわたくしはまず感嘆したのでありますが、「因果相続」そのものは時間ではないが、諸法の因果相続を認識する主観の側に、それを「時間」として受けとめる力があるという意味に理解されます。唯識にとって「存在が時間である」とは、存在を認識する主観の認識力に時間性、格があるという意味であります。

認識主観に外界を時間的に受けとめる認識力はあるけれども、しかし時間的認識を可能ならしめる法の変化は無常の力であり、それは認識のそとにあるものであります。そのことは唯識仏教でもアビダルマ仏教でも同じでありますが、ただ唯識仏教が、「無常の力」と「時間」とを区別していた点に、アビダルマ仏教より一歩進んだ点があるように思われます。と申しますのは、無常がそのまま時間ではないからであります。

動物にはおそらく時間は存在しないであろうと言われるのは、たしかに無常は動物にもあるでありましょうが、しかし彼らは、それを無常として受けと



めないからであります。受けとめる能力がないからであります。しかし、有難いことには、人間の場合は、主観が無常を無常として受けとめることができ、そこに時間が成立するのであります。

しかしながら、無常を無常として認識するためには、「常住」を認識していることが前提条件であると思われまゝ。常住の認識なしに無常の認識は成立しないからであります。

唯識仏教が時間を「假法」として立てる思想の根底には、永遠者である「真如」の認識が横たわっているのであります。この「永遠」と「時間」とを即一に考える思想は、アビダルマ仏教にはまだ熟していなかったのではないのでしょうか。

このように時間のもつとくところは、「法の無常」ということでありますが、この無常（アニッチャ *anicca*, アニトヤ *anitya*）ということは、原始仏教でもっとも根強く主張されてきた教理の一つであると思われまゝ。

仏教の時間論からわたくしが学んだことは数多くでありますが、「諸行無常」(一切行無常 *sabbhe dhamma anicca*)

harā anicci, Dhammapada 277 etc.)、<sup>1)</sup>「諸法無我」(一切法無我 *sabbhe dhamma anattā*, Dhammapada 279)<sup>2)</sup>「識」(*viññāna* 了別、別知、分別)、「般若」(*prajñā* 慧、智)などの意味を正しく理解することができたことは、一つの大きな収穫であります。有難いことであります。

常識では、時間は過去から現在へ、さらに現在から未来に移っていくと考えます。これに対して有部は、未来から現在へ、さらに過去へという時の流れを考えております。このような時の流れを考えるのは、時間を構成する法が刹那滅であり、一刹那一刹那が独立しているから見からであります。

極端に言うならば、わたくしたちは現在だけに生きてるのであり、一歩たりとも過去にも未来にも足をふみ入れることはできないのであります。道元がいみじくも「前後際断」と表現したように、あらゆる存在は現在世から過去世へと流れてしまい、もとに戻ることはありません。

現在世は過去世とは断絶しているのでありますか

ら、わたくしたちは生きている限りは「現在に生きている」のであり、そして、それ故に「現在は永遠の長さを持つている」ともいいうるであります。う。「時は流れる」というとき、その「流れる時」を流れさせている「流れない時」が、その根底にあると思われます。

これはいづゆる「永遠の今」といわれる現在であり、これを仮に「動かない現在」と名づけるならば、仏陀が「不死を悟った」というとき、その不死とはこの動かない現在はこの動かない現在を発見したのだと言ってよいであります。

「涅槃」もこのような「動かない現在」であると言つてよいと思ひます。しかし、わたくしたち凡夫は、この動かない現在に安住することはできません。喜怒哀楽の感情やもろもろの欲望（衝動・欲求）があるために、時に流されるのであります。というのは、心が煩悩に支配されて、時に執着するからであります。

ここで、「永遠」の問題について、仏教から一応

離れて考察してみることになります。

わたくしたちが永遠について語る時は、わたくしたちが経験について語る時とは異なった立場に立ち、異なった方法に頼っているということを忘れてはならないと思ひます。わたくしたちの現実の経験は、すべて有限であり、無常であるからであります。

「永遠とは何か」という問いに答えることは大変難しいことでありますが、わたくしは数年前、渡辺慧先生の「時」（河出書房新社刊）という名著から多くのことを学びました。この魅力的な「時間学」によれば、次のような「三つの永遠」が区別されるというのであります。

わたくしたちは「永遠」を経験できないのでありますから、直接的に永遠を定義づけることはできません。したがって、「永遠的でないもの」（「時間において変るもの」・無常）の対立概念として永遠を捉えるしかありません。

「時間において変るもの」の対立物の定めかたは「時間においてあるものはすべて変るか」という問

いに対する答え如何にかかわっていると云えるでありましょう。

この問いに対する第一の答えは、「時間においてあるもののすべてが変るのではない」、すなわち、「変る諸現象の中に変らざる要素が存在する」という答えであり、このような考え方を「不變要素の仮説」と名づけ、このような立場で得られる永遠を、便宜上「時間的永遠」と名づけます。

第二の答えは、これに反して「時間においてあるものはすべて変る」という答えであり、このような考え方を「万物変化の仮説」と名づける。この仮説からもっとも自然的に導かれるのは、「時間においてあるものはすべて変る。ゆえに変らざるもの、すなわち、永遠なるものは、時間においてあらざるものである」という立場であります。このような立場では、永遠とは時間そのものの対立者であり、この「時間の対立者としての永遠」を便宜上「非時間的永遠」と名づけます。

しかしながら、この二つの対立者の中間ともいふべきところに第三の立場が考えられます。それは不

変要素の仮説と万物変化の仮説との、次のような妥協から生じます。すなわち、「万物は変化する、しかし変化するという性質は不變である」ということが言えるでありましょう。

このような第三の立場から、永遠とは、限りなき変化、生成、進展であるという永遠観が成立するのでありますが、これを便宜上「進展的永遠」と名づけます。

第一の「時間的永遠」は、密接に「回帰的永遠」、「環状の永遠」と結びついており、このような回帰的な永遠の觀念の発生は、自然現象に直接依存した農業社会、進展性のない封建社会にその基盤をもつてあらうと考えられます。そして、このような回帰的な時間は、初端、終端がないという意味でも永遠であります。環というものは、有限の中に無限を盛りこむ、もっとも簡単な、もっとも古い手段でもあります。

このような回帰的な時間的永遠には、インド宗教の輪廻、ギリシャ哲学の時間観、近代ではニーチェの永劫回帰などが属するといえるでしょう。(つづく)



## 一枚起請文のころ

まつ  
しま  
じょう  
せん  
松島定宣

(小田原市常光寺住職)

一月二十五日は、元祖法然上人の御忌日である。その御忌会も、現在では陽春四月に移されて、総本山や大本山で広く行なわれ、念仏同行の人たちを多く集めている。

しかし考えてみると、元祖さまこそは私たち念仏信者の依り所であり、そのみ教えは私たちの人生を導びく灯火である。心より尊信し、み教えに随順して、念仏をよるこび生きねばならぬ。然し浄土開宗八百年を迎えて種々なる記念行事や法要が盛んに営まれても、善導大師千三百年大遠忌の勝縁にあっても、どうも念仏の信火が燃

え上らない。念仏の声が広がらないようにみえる。どうしてであろうか。

元祖法然上人を尊信し、慕いまつる心が、たらぬ為ではなからうか。この帰依信順の心が弱くては、み教えに従っての念仏に生きる生活はでてこない。元祖さまへの帰依の念は、その全生涯、来世をもかけての御誓言である一枚起請文のみ心を、正しく受けとることによってこそ、確かなものになるのではないか。そのように考えると、一枚起請文のみ心を正しく受けることこそ、私たちの念仏信仰の肝要であり、念仏者の先ずつとめるべきこ

とではないだろうか。

二祖鎮西聖光聖人は「わが大師釈尊は法然上人なり」と元祖さまを尊信なされた。親鸞聖人は高僧和讃の中で「阿弥陀如来化してこそ本師源空としめしけれ」と、師法然上人を阿弥陀如来なりと仰信なされた。だからこそ、念仏に奥深い秘義があるのではないかと、遙々関東から京までも訪ねてきた信者達に「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀に助けまいらすべしと、よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに、別の子細なきなり」と師法然上人への絶対帰依の情に立ちて、奥義をききたいと言う信者達をつき放し、「たとひ法然上人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう」とまで言っておられる。そして、さらには「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳もほねをくだきても謝すべし」と師への感謝報恩を誓っておられる。まことに美事な師法然上人への帰依信順の情である。あの親鸞聖人の強い信仰の依り処はここにある。

省みて私にこれ程の尊信帰依の心があるだろうか。思い上り強く、我執の捨て難い愚痴の身われ、元祖さまの

み教えを浅学の身で計り、み心を受けとりそこねてはいしないかと、自戒沈思することしばしばである。二祖さまのような、親鸞聖人のような、純真無私の真情をもって、元祖さまを仰ぎ信ずるようになりたい。ならせて頂きたいと切に念じつとめてきた。

おかげにて、心して一枚起請文を拝読する毎に、元祖上人の私への温い慈愛の導びきが体感されるようになった。み心が惻々として身にしみ、文句なしに、この方の導びきのままに、「只一向に念仏する」ことでもいいのだと、信心決定し、よろこびの念仏の声が出る。思い煩うことも、だんだんと消えていく。

ところが、この一枚起請文はまことに簡潔であり、一代の文豪幸田露伴先生も実に日本文で書かれた神品でありますとまで感動しておられる名文である。それだけに、すらすらと読みすごして、その尊きがわからず、真意を受けとりそこねるおそれがある。間違つて受けとっては、念仏の信が確かなものにはならない。

一枚起請文には、まず、元祖さまの御苦勞、体験を通しての念仏信仰の肝要、教えの至極が明らかにさとされている。即ち「観念の念仏や、学問として念の心を悟っ

ての念仏ではなく、ただ本願を信じて口に念仏を申す但信口称の念仏にて往生極楽できるのだ。全ては南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生できると思う中にこもっている。だから念仏を信ずる人は、どんなに学問しようとも、愚痴に還って、只一向に念仏するがよい」と誠に明快に念仏の安心起行が言い尽されているのである。

そして「このほかに奥深き事を存せば、二尊のあわれみにはづれ、本願にもれ候べし」と、末代の私たちに信を決定せしめ、疑いや迷いを消除せしめんとする慈愛のところが、決然たる起請の形で述べられている。この段こそ元祖さま御自身の全てをかけての起請である。

起請とは、仏神を起動勸請して、誓うところが虚妄でない事を証し、もし一分でも違ふことがあれば、仏神の罰を蒙り、今世後世救われぬ身とならんと、誓うことである。元祖さまは、この一枚起請文の「このほかに奥深きことを存せば云云」の段で、正しく次のように起請して下さるのである。

「平生勸化してきた）但信口称の念仏にて往生できる、この一事の外何の深義も秘義もない。もし私がより深い義理や教えを知っていて、秘しかくして語らないのであ

れば、そのような私は、釈迦、弥陀二尊の御あわれみに外れ御本願からまれて、わが八十年の生涯の全てが水泡に帰し、日課七万の念仏も空しく、三塗苦難の身となろうぞ」と、言外に、必らず己れのはからいをもって本願を疑ったり、邪義妄説に迷うてぐらつくことなく、但信口称の一行にはげむべし、との実に強く温い元祖さまのお心がこめられているのである。まことにこれ以上なき、おそろしい迄に真実心あふれる御誓言である。拝読する度に心うたれずにはおれない。

この起請の段を「もしこの外に奥深い義理を知ろうとするならば、釈迦弥陀二尊の御慈悲にはづれ、本願の救いからもれるであろう」等と、元祖さまの私たちへの、この上なく厳しい誠めと、受けとるようなことがあってはならぬであろう。

思えば元祖さまの晩年は、まことに御苦勞、御心痛の日々であった。四十三歳御開宗以来三十年が間は、自ら「無為にして日月を渉る」と述べていられる如く、單調静寂な生活であられた。しかし晩年の十年が程は騒然たるものであった。念仏の教えが広まり盛んになるにつれて、お弟子と自称する者達が、師説と偽って聖道諸宗を

そしり、破戒を勧め、ほしきままに自分勝手な念仏の義をと見え出した。それにまどわされるものも出て来て、社会を混乱させるおそれともなったであろう。比叡南都の諸宗諸寺の怒り、遂には専修念仏の停止、法然上人流罪の宣旨が下る。元祖さまがどんなにかこのことを悲しまれ御心労になったことか。

その御苦勞の中から、邪義妄説を止め、悪行を防ぎ、惑わされる者なきを念じて、五度以上も起請なされ、念仏の正義を明らかにしておられる。すでに念仏は全国に広まっていたが、私たちの想像を絶する邪義妄説が、法然上人の教えたとして、九州や越後の方でも流布されていた。現在と違う交通通信などの事情の中では、これら邪妄を是正するには、起請という手段しかなかったのはなからうか。

四国配流から勅免を蒙り、摂津の勝尾寺におられた時、元祖さまはすでに七十七歳の御高齢。「一念義停止の起請文」はこの時のものである。

「(前略) 弥陀の願を頼むものは、五逆(父母を殺す等の極重罪)はばをかることはない。心にまかせてこれをつくれ、等と懈怠無慚の業をすすめる者があると言う。又、

法然上人の念仏は、ただこれ外の方便で、内に実義があるのだ。人は未だこれをしらない。所謂(いふ)ところに弥陀の願をすれば、身必らず往生す。往生の業はこれで満足するから、この上は一辺なりとも重ねて名号を唱えることはない。法然上人の禅房において、門人など二十人で秘義を話していた時、伶俐なる機根の仲間五人だけが、この深い法義を授けられた。自分はその一人である。これはかの上人の己心中の奥義であって、容易には授けられないもので、その人の器をえらんで伝授されるのだ、等という者があると聞く。これら風聞の説がもし事実であれば、これらは皆虚言である。迷う者を憐まんが為に、今誓言をたてる「貧道(元祖さまのこと)もしこれを秘して、いつはりてこのむねをのべ、不実のことをしるさば、十方の三宝、まさに知見をたれ、毎日七万遍の念仏むなしくその利益をうしなはむ」。(後略)」

「世間虚飯」の世の中、罪惡の凡夫に涙される元祖さまの御心痛が想われる。鎌倉二位の禅尼(北条政子)への御消息などからも察せられるように「智恵第一の法然房であるから、余程奥深いことを知っておられるに違いない。余行はさせずして称名念仏ばかりをすすめ給うの

は、熊谷入道だの津戸三郎など無智の輩であつて、有智の者の為には別の秘伝がある」等との説が鎌倉でも横行していた。

これらの「極まりなきひが事」の流行によつて感わされ、専修念仏に迷ひを生ずる者をあわれんで、誓言起請なされた最後のものが一枚起請文である。これは、かねて二祖聖光上人に授け給える御法語（もろこしわが朝のもろもろの智者たちの云云以下、智者のふるまひせずして、ただ一向に南無阿弥陀仏と申てぞかなはんず」まで、教えの内容は一枚起請文と全く同一である）に、敢てこの起請の段のみを加えて、源智上人に授け給うたのである。このことをもつてみても、かく起請せずには居られなかつた元祖さま

### ◎ お願い

諸物価の高騰、及び郵便料金の値上げにより、弊会会員の年会費、つまり月刊誌『浄土』の年間購読代金を、やむをえず値上げ変更することになりました。

昭和五十六年四月一日より、新年会費三、〇〇〇円とさせていただきます。

法然上人鑽仰会

の御心中に胸いたむ想いがする。

私たちが朝夕に拝読し、最も親しんでいる一枚起請文であるが、何気なくではなく、心して拝読する時、この起請の段に至るごとに、かほどまでに元祖さまの全てをかけての御誓言に裏づけられた念仏のみ教、最早何の疑い迷うことやある。己れの兎角のはからいを捨て、ただ素直に、ありのままにて、仰ぎ信じて、念仏に生きんと

の想いがわきあがる。  
陽春四月の好季、元祖上人の御忌会を迎えるとき、特に心して一枚起請文を拝誦して、元祖さまの慈愛の真心を肌身感じて、愈々念仏の信を決定したいものである。



## タロ、再び

— 伊豆高原徒然草より —

木の 下 隆 一  
きの した りゅう いち

(随筆家)

タロが姿を消して、二年二ヶ月が過ぎた。

去年の八月終りの或る日、女房と私は駅前のスーパ―まで買物に行こうとして、通い馴れた林の中の坂道を歩いていた。道はなだらかな下りから右にカーブして、それから急な上りになるが、その途中まで来た時、女房が頓狂な声をあげた。

「タロ?! タロちゃん!!」

その時、忽然と二十米ほど前方に小型の日

本犬が姿を現わしたのである。犬はよたよたと坂道を上って来た。尻尾の巻き具合や耳の形から、咄嗟に私もタロだと思ったが、立ち止って近づくのを待った。

「タロ、どうした?」

と、声をかけてしゃがみこむと、犬はフラフラと私の腕の中にもたれて来た。荒い息遣いは暑さのせいだけではなさそうであった。体中噛み傷だらけで、後肢の傷口にはまだ血

が滲んでいた。タロなら左の腿に傷跡があるはずだがと探ってみたが、それらしいものは見当らなかった。二年以上経っているから、傷は消えてしまったのであろう。

「タロでしょ？」

「そうらしいな」

赤い古びた首輪には見覚えがあった。いなくなつた時つけていたのと同じ物であるが、決め手となる鑑札はなかった。取られたか落したかしたのだろう。

犬は何を思つたのか。ペロツと私の唇を舐めた。そして初めてちょっと尻尾を振つた。

「どうだ、ピースの味を思い出したか」

私は言つた。

「こいつ、タロに間違いないよ。しかしひどい蚤だな」

私の手と言わず胸と言わず、無数の小さい赤い蚤が這っていた。

「蚤取り粉、薬屋へ行けばあるかしら」

「買物ついでに買つて来てくれ」

手を放すと、タロはまた前に向つて歩き出した。目的を持った歩き方だった。

「どこへ行く気なのかな」

「うちへ帰ろうとしているのよ、きつと」

「どうか、それは」

「買物は私がしてくるから、貴方ははやくタロを……」

女房と別れると、私はタロの後を追つた。疑いもなく、タロは我が家へ帰ろうとしていた。T字路に來ると、鼻をあげて風を嗅ぐような仕種をして、正確に道を選んで行つた。途中、万一のことを考えて、私は道端に落ちていた五十糎ほどの針金を拾っていたが使わなくて済みそうだった。

我が家の門の前の長い坂道を上り切つたところで、力つきたのかタロは道にへたり込んでしまった。

「タロ、お前のうちはこっちだ」

首輪に針金を結びつけると、私は裏門から家にはいった。何の抵抗もなく、タロは私の

後からついて来た。前庭に通じる柴折戸を開けて、

「タロ、覚えているか?」

しかしタロは何の反応も示さなかった。

「ひろみ、ひろみ、いいものを見せてやる」

私は大声で留守番をしていた娘を呼んだ。

「タロが帰って来た」

「タロが?!」

訝しそくに娘が顔を出した。ひろみは初対面だから無理もない。

「ほんとにタロなの?」

「飼主の俺が言うんだから間違いないよ」

取り敢えず、水をやった。タロは坐ったまま

ま温和しく水を飲んだ。それはいなくなる前の姿そのままであった。

「御飯どうするの?」

「俺が作るよ」

大分腹をすかしているようなので、御飯は少な目にして、たっぷり湯をかけて軟かくしてやった。ハムを細かく刻んで混ぜ、薄味が

好きだったので醤油は控え目にして出来上りである。手をかけている暇はない。早速タロのところへ持って行くと、タロは横になって荒い息を吐いていた。

「可哀そうに、すごく疲れているみたい」

「タロ、ほら飯だ。皿に覚えがあるだろ」

タロはのろのろ起き上ると、ゆっくり食べ始めた。そんなタロの様子を見て、

「タロや、あなた上品な食べ方するのねえ」

と、娘は言った。

「昔、お母さんも同じことを言ったよ」

「そう、じゃあ間違いないわね、タロに」

体が弱っているせいか、タロは半分以上食べ残した。

「涼しいところへ、玄関のポーチへ移してやったらどうかしら」

娘に言われるまでもなく、私はそうしてやろうと思っていた。ポーチは十二、三段階段を上った上にある。何故か、タロは嫌がって階段を上ろうとしなかった。

「どうした、昔はよく上り下りして遊んだじゃないか」

タロの嫌がりようは常軌を逸していた。階段に恐怖を感じているようであった。

「どうしたのかしら？」

「階段に何か悪い思い出でもあるのかなあ。例えば階段から蹴落されたとか……」

仕方なく抱いて上らざるを得なかった。私はまた蚤だらけになってしまった。

タロはぐったりして寝てばかりいた。十分おきぐらいに女房と娘が覗きに行つて声をかけるので、安眠は出来なかったであらう。

「あんまりしげしげと見に行くなよ、タロだつて迷惑だ」

そう言う私が足音を忍ばせて見に行くのだから、あまり強いことは言えなかった。

夕方、激しい嘔吐をしたというが、昼寝をしていた私は見ていない。恐らく、弱っていた胃が受けつけなかったのであらう。それでも日が落ちてから散歩に連れ出すと、昼間よ

りは少し元気な足取りで歩いた。しかし、とうとう脱糞しなかったのが気懸りだった。

「獣医さんに見せた方がいんじゃない？」

「大丈夫だよ、一晚寝たら元気になるさ」

私は樂觀していたが、

「やっぱりお医者さんへ連れて行つた方が……」

夜十時頃、玄関へ様子を見に行つた娘が女房に言った。

「体中びくびく震わせて、ヒーヒー悲鳴をあげてるの、死ぬんじゃないかしら」

「伊東の獣医さん、何番だった？ ……探しているより鈴木さんに聞いた方がはいいか」

女房が電話すると、鈴木さんは獣医との約束を取りつけてから、折り返し電話をかけて来て、車で迎えに行きますと言ってくれた。

その夜、私はタロの容態を見るためにまんじりとしなかった。体の痙攣は一晚中続いた。こいつ、もしかすると死ぬために帰つて来たのかな、と私は思った。

翌朝、鈴木さんの車で獣医へ行くと、めっきり年とった老医は、

「ふーん、二年二ヶ月ぶりにねえ」

と、しきりに感心して体を撫でまわしていたが、

「蚤だらけのところを見ると、どこかで飼われていたとは考えられない」

と言った。私も同感であった。

「折角来たんだから、気つけ薬を一本打っておくか」

気つけ薬が何であったか知る由もないが、効果は靦面で、タロは見る間に元氣になった。家に着いた時は、もうぐいぐい鎖を引張って歩いた。完全に昔タロに戻っていた。

真夜中、しきりに外へ出たがって鳴くので外へ出すと、あんなに嫌がっていた階段を自分から下りて行った。中天にややいびつな丸い月がかかっており、秋を思わす涼しい風が吹いていた。

「当分はしばらくつけておかないと野性に戻っ

ているから、また家出してしまおう」

という老獣医の声が胸を掠めたが、私は敢えてタロの鎖をはずしてやった。家出したければすばい、そんな思いだった。

しばらくの間、私のそばで遊んでいたが、立ち上ると、じっと私を見つめた。月光に照らされた顔には、いままで目立たなかった白い隈取りがはっきりと表われていた。この隈取りがタロを確認する最後の決め手だったのである。いま一つはつきりしなかったタロを、私は遂に確認することが出来た。しかしこれがタロとの二度目の別離となってしまった。

タロは二度三度尻尾を振ると、さっと身を翻して坂道を駆け下りて行った。

きりつと巻いた尻尾が旗指物のように月光に揺れていたが、やがて見えなくなった。

タロは再び完全に消息を絶ってしまった。見かけたという噂すらない。

(完)



## 落ちこぼれ——青春の符——

川<sup>かわ</sup>村<sup>むら</sup>悠<sup>ゆう</sup>穂<sup>ほ</sup>

(静岡市西福寺住職)

少年にとって、これほどがっかりする言葉はないでしょう。「何くそ」といって、頑張っているみんなの仲間入りが出来て行く子はよいけれど、頭は悪い、記憶力は無い、体は弱い、自分では頑張っている積りだがみんなについていけない子。やっぱり「落ちこぼれ」。「あいつは駄目だ、努力しないからだ、頑張りが足りないからだ」頭からいわれては、どうしようもない。誰もこんな馬鹿に生まれてこようとは思わなかったのに、親まで「お前は馬鹿だ」と、いうなんて、勝手に生んでおいて、何をいうんだ、つい反発したくなる。これが本当の親かしら、自分はどこからか連れてこられた子ではないか、親をも疑いたくなる。ブーブーブーブー、あのオートバイの音、何ともいえない音がする、大きなやつは格好いい、

町の中をのり廻してやれ、みんなびつくりするぞ、面白いぞ、学校なんて面白くもない、記憶力のある奴なら復習しなくても出来るだろうが、学校から帰ると、又、塾へやらされる。勉強してどうなるんだ、社会に出て偉くなんてどうなるんだ、なりたいたい奴はなれ、食う位はどうでもなるさ、大人ってずるい奴さ、悪いことばかりしているではないか、アッハハハ、先生っち、偉そうことばかりいって面白くもない。分ったようなこといって何も分っちゃいないじゃないか。何故こんな人間に生まれ、何の為に生きているのか、何故こんな生活をしなければならぬのか、僕等の疑問に納得のいくように答えてくれないじゃないか。

敗北主義かも知れない。しかしこんなことを考えている

子ばかりではないと思うが、少年院の子供達、鑑別所に入ってくる子供達、顔を見ればみんな可愛い子供達です。どうしてこんな所に入ってくるのだろうか。近頃は暴走族、学校暴力の子がふえてきているようです。

一昨年夏のことでしたが、鑑別所に一時間の話に行きました。室に入るとワッハハハと笑うのです。二十数人の子が足を組んで腰掛けていて、手をたたいて笑うのです。所員が私を紹介すると、又、笑うのです。演壇に立って「今日は暑いね」というと、又、笑うのです。私をまごつかせ、話をさせないようにしているのだなと思いました。知らん顔をして話を続けました。その内にだんだん静かになり、私の顔を穴のあくようにして見ていました。が、一時間経って最後には、みんな一緒に合掌して私のお念仏をきいていました。

やっぱり何かを求めているのです。しかしはっきりした回答が得られていない、心の落着き場所が得られていない、そう思ったのです。話をきいた子供達の、その後は知りません。しかし何かを得てくれたと思ったのです。別の人に、子供達に話したその話をしたら、その話を書いてくれないかと、再三いわれたことがあります。

ので、今回はその話を簡単に書いてみたいと思います。

私達は、生まれるかと思つて生まれた人は誰一人ないと思います。然し気がつかないけれど、生まれるかという気があったらばこそ生まれて来たのかも知れない、けれどそれは分らないことです。私もそうですが、あなた方もそうでしょう。気がついたら生まれていたのです。

そしてこんな生活をしているのです。私達の親もそうなんです。そうして私達を生んだのです。こんな頭の悪い、こんな体の弱い子を生もうと思つて生んだのではないのです。よい子が生まれることを願つていたのです。うが、こんな頭の悪い体の弱い人間が生まれて来たのです。自分を生んだこの母親、はたして自分の母親であらうか、生まれて来た当時のことを覚えている人も殆どないと思います。これが父親、はたして本当の父親か、自分と似ても似つかないような親達、廻りの人が、この人が君の親だといっているから、自然に親だと信じてしまっているだけのことです。さてどうしてこのようなことが続いているのでしょうか、いつからこんなことが始まったのでしょうか、それを探ってみましょう。

私達の親も、そしてその先祖の先祖とたどって行けば

大変な数となり、地球上の全人類の数より多くなりま  
す。では、この私達の先祖即ち人間はどうして出来たの  
でありましょうか、学校で教わったことは、人間の先祖  
は猿であったといひます。それでは猿の先祖は何であっ  
たのでしょうか。先祖をたどりたどり行けば、この地球上  
に現われた最初の生命は、アミイバとか弁毛虫とか、バ  
クテリアのような生命であったということです。その  
「いのち」は、核酸と蛋白質から出来ていると三十年程  
前に科学者により説明されています。では、その核酸と  
蛋白質はどうして出来たのでありましょうか。

もう一度、私達の現実の世界に帰りましょう。私達の  
体を見てみましょう。私達の身体は細胞によって出来て  
いるということです。ではその細胞は何によって出来て  
いるかというと、分子によって出来ているといひます。  
そしてその分子は原子(アトム)によって出来ていて、昔  
はもうこれ以上分解することは出来ないと思われたもの  
でした。そこで唯物主義というものが盛んとなり、もし  
この原子を分解した場合、何も無くなったとしたら、こ  
の世は心から出来ているというので、唯心主義というこ  
とになるのでありますが、仏教では仏心一如の世界であ

るといつているのであります。さて、研究は更に進み、  
現在では、その原子を構成しているものは陽子と中性  
子、或は電子が核を構成しているということであり、そ  
の陽子と中性子を結んでいるものに何かがあると研究さ  
れたのが湯川秀樹博士であり、仏教の俱舍論の中にある  
極微という言葉からヒントを得られ、中間子を発見され  
たということがあります。さて、何故このようなものが  
出来たかということをも更に更に物理学者は研究してい  
るのでありますが、仏教では結論として「無明」という言  
葉であらわしています。私はこれほど正直な言葉はない  
と思ひ、私はこの言葉が好きなのです。「明らかでない」  
「はっきりしない」「分らない」と受け取れますが、然し  
これを、「盲目的に生きる」という意に取ります。この  
無明がこの宇宙にはたらく、生きよう、生きようとして  
転々として心となり、物となつて、ここに一つの「いの  
ち」が誕生した。だから、ここに現われた「いのち」  
は、善とか悪とかということに関わらず、生きよう、生  
きようとして、その環境に應じ、あちらの方に、こちら  
の方に生きよう生きようとした、それですから、海の中  
を見れば千差万別の魚となり、貝となり、海藻となり、

陸に上つては動植物となり、猿ともなり、そして人間ともなつて来たのであります。それでありますから、死にたいと思つてゐるものは一つもないのです。あなた方もそうでしょう。そして、ダーウィンによれば「進化は自然選択により起る」ということにも当ると思ひますし、近世は「人為選択」により、新しい生命形態が現われてゐるということにもなります。この現われた「いのち」が善いこと悪いこと、即ち善業悪業を行なつたのですから私達の体の中には、その善業・悪業が一杯つまつてゐるのであり、それで私達は宿業の現われであるといふのであります。そこで、今まで生きよう生きようと無明に盲ぜられて生きて来たけれど、一步ふみ止まつて廻りを見渡せば私達は生かされて生きてゐることに気がつくのであります。私達はみんなのお蔭で生きてゐるのであります。それに気がつくことによって、社会の中に於て、本当の自由としあわせが得られるのであります。

今年も、少年院では職員の方々や外部の方々の力により、三月二十四日卒業式が無事行なわれました。少年達が明るく正しく仲よく社会に生きぬいて行くことを念願し、生徒の意見発表と論文集の一部を抜粋して終りとし

ます。

「私は、これまで16年間生きて来て、人生観と言うものは、あつたでしょうか？ 全くと言って良いほどありませんでした。人生の価値、人生に目的がなく、その場、その場の気分で、なにしろ、おもしろければいい、楽しければいい、早い話しが、自分さえ良ければいいんだと言う気持ちがありませんでした」

(本科後期生 K・S)

「今まで、シンナー、窃盗、暴走族などをやり、それ生きがいだと思ひ学校にも迷惑ばかりかけていた」

(J中学校 T・H)

「ほんとうの人間生活、すばらしい人とのつきあい。ここで学んだことは、社会に出ても、もっともやくにたつことばかりです」

(U中学校 T・S)

# 浄土句集

三重 森 静枝

将来は僧となる子とお身拭ひ

評 総本山知恩院のお身拭ひは十二月二十

五日である。「千人の称名の中お身拭ひ」で御門主が元祖様のおつむりより初められる。その厳肅なる会座に僧となる子と待られた。子の眼はかがやいていた。

福岡 荒牧 亀齡

何もかも弥陀にまかせて老の春

評 生死を弥陀に任せて居れば、元気であ

つても病氣でも老人は倅せで、息子からも婆様からも大事にされるのである。

東京 吉原登起子

風吹きて道なきまでの落葉かな

## 一田牛畝選

評 風が吹けば落葉は激しい。その落葉が

積って道を全く埋めているのである。その落葉を踏んでの登山は快いものだ。

東京 新井 新生

落葉濡れ滑り滑りて坂上る

評 落葉に降った夜半の雨もあがって山を

登る人の心は爽快である。濡れている落葉の坂は滑り滑って難儀な一面楽しい。

福岡 上滝津弥音

母の忌やあの日の如く風花す

評 母は寒い日に死なれた。その日は雪が

風に舞ふ日であった。弔客は雪を払い次から次に。今日もあの日の如く風花が。

入念に看経長し三ヶ月

京都 安藤 寛

ゆく年の野燈々灯しをり

福岡 安藤平次朗

老どちの指さし拝む涅槃像

福岡 高良 慈風

時雨来て急ぐ若狭の寺詣り

東京 真野 竜

独り言辯となりたる日向ぼこ

東京 栗原とも子

朝市の大根縄で束ねあり

東京 真野よし子

高殿に虎笛聞く日や木曾路ゆく

東京 小笠原香祥

京の凍て堪えて加行を満願す

福岡 荒牧 還愚

寒林や道標傾く旧街道

東京 細田 初枝

その日まで南瓜大事に冬至かな

東京 田中 秀代

大分 丹羽 難中  
はるばると夜汽車につかれ冬安居

寒肥の指図あれこれ老庭師

福岡 稲永 新

臉裏の夫を送らん除夜の鐘

東京 阪入志津枝

念仏のこだます夜の冬木立

福岡 植藤みきを

雲切れて日射に浮ぶ古処の雪

福岡 高良 幸代

冬の嶺鈴鹿馬子唄こだまして

東京 栗原やえ子

無花果の切り倒されて家建ちし

福岡 永江 隆説

繭の実に群れし雀の翔の羽音

福岡 服部 光代

鈴なりの柿の大樹に百舌鳥来る

東京 鳥居 千代

元日や天下和順の四方拝

福岡 前田 秀峰

吹雪く日や日ねもす庫裡に僧ひとり

福岡 青柳 良巖

群明の嘆き涅槃は死に非ず

愛知 渡辺 杜水

福笹のからみ合いいるバスの中

福岡 国友 星畝

旧友の賀状なつかし若返る

三重 山田 うた

初孫の笑顔可愛ゆき雛祭

山口 上野 明達

礼節をむねとし師弟初稽古

福岡 行正 明弘

雁渡る空長々と仰ぎけり

東京 猪瀬 幸子

寒月やネオンの消えし大路行く

群馬 島津 か寿

庫裡よりの海苔の佃煮よく匂ふ

福岡 釈田野ねはん

北国の夫の好みし納豆汁

東京 鈴木 葉子

流れいる大根白く手は真赤

神奈川 松本せつ子

中日の花の雨なる開山忌

一田 牛畝

## 表紙のことば

### 「パンジーと貝殻」

陽春の候ともなると誰でもが緑をもとめて野山を恋うのではあるまいか。ときには遠く空への旅を夢みる人もいよう。特にコンクリートジャングルの中で味気なく毎日の繰返しに明け暮れている人達にはこの思いは猶更のことと思う。

「山路きてなにやら床しすみれ草」

旅の人芭蕉が京都から大津への山の中でよんだ句だけれど、芭蕉のみたすみれはむろん路端に咲く紫色の小さくて可憐な日本のすみ

土屋 正男

れで、ヨーロッパ原産の三色すみれ（パンジー）のことではない。

さて芭蕉のみたすみれはどんなすみれだったのだろう。たちつぽすみれかにはいすみれか、いま植物図鑑を開いてみたら三十図余りも載っていて日本には凡そ五十四種もあり、觀賞の他に香料、薬用、食料にも供する効用多き植物とあった。

現在ほど道路も公園も整備されない頃には東京の街中にもちょっとした隅にはその可愛

らしい姿がみられたのですみれとはそんな花と解していた。だから三色すみれは胡蝶すみれともいふと言われてもすみれの意識には入りにくかった。それが宝塚歌劇が盛んになり女学生達が「すみれの花咲く頃、君を知りぬ」などと歌われたところからいつのまにか自分のすみれのイメージがパンジーにとつて変わってしまった。

宝塚のすみれは三色すみれが似つかわしい。近頃は公園を飾る春の花にもパンジーが多く植栽される。パンジーは華やかで明るい。だけれど歌劇発祥当時の宝塚温泉にはパンジーが沢山あったのだろうか。

先日東南アジア方面の旅行から帰った人からおみやげにと大きくて白く美しい貝の殻を貰ったのでそれにパンジーを入れてみたら、貝の白さに映えて花が一層活きいきと感じた。

直径三〇センチ程もあろうか。この貝は、南海の碧く澄んだ海底にいた頃どんな夢をみていたことだろう。

「蜃気は楼台を象る」——昔の人は黄雀という鳥が海に入って五百年たつと大きな蜃（はまぐり）となって島であった頃の夢をみる、それが蜃気楼になつて現われると信じていた。蜃とはこんな貝のことかもしれない。

この貝は陽光の深く透る安穩であつたろう海中から一たび採集されてからは、離れたこともない二枚の殻も剝がされて片かたとなつて今ここにある。

別かれ別かれになつて遠く何処にかあるかけがへのない片々の殻を恋い偲びつつ、海では見たこともない華麗な陸上の花を抱いて、たどり来た転蓬の悲しい旅を噛みしめているかのように、白い貝は黙ったままである。

# 現代社会と浄土教



うえの  
上野

ひろし  
浩

仏典の伝えるところによれば、釈尊出現当時のインドには恐るべき思想を開陳するものが数々いた。そのうちの主なる六人の師を六師外道と呼ぶ。その中の一人にブーラナ・カッサバがいた。彼は裸形の行者として有名であったが、大体次のようなことを説いた。すなわち「虚言を語っても、盗みをして、他人の妻と通じて、人を害しても、生きものおよび人間を苦しめ、切断し、肉塊となし、あるいはこれを殺そうとも、いかなることをしてもこれによって悪の生じるということもなく、また悪の報いのくることもない」と。この道徳否定論は彼につづく思想家たちによってもとなえられた。また他の一人にアジタ・ケーサカンバラがいた。彼は常に毛髪でつくられた衣をまとっていたといわれるが、その説くところはすなわち「人間は地、水、火、風の四大要素のみで構成され、人間が死ねば実在するそれぞれの要素に還元され、いろいろの機官の能力は空に帰して、無となり、あとに何も残るものはない」というのである。これは当時の代表的唯物論で、道徳否定論のもともとなっていた。これらは道徳の頽廃した当時の社会現象に應じて起ったものであった。

これに対比して、現代の私共の社会の姿は一体どうであらうか。積尊の時代からすでに二千数百年を経ている今日、社会は道徳的に幾分でも進歩しているであらうか。こう問われれば私は然らずといわなければなるまい。私共が今日、社会現象に一瞥を与えただけでも毎日のように悲しむべき事件、また恐るべき事柄が報道される。例えば庶民大衆の代表者や役人のあるものは、平然として不正な金銭を授受し、真実を問われるときは虚言を吐き、大企業のあるものは多くの人間を犠牲にしてまで利潤追求に明け暮れ、あるいは甚だ愚かな人間は何の目的もなく、罪もない良民を傷つけ、殺し、あるいはまた恩師に対してはむかい、これを傷つけ、また他人の夫や妻と通じ、場合によると夫は妻を殺し、妻は夫を殺し、由しきは親は子を殺し、子は親を殺し、またあわれにもみずからの命を絶つものもある。そして国と国之间になると絶えず睨み合い、はては戦火に訴え、ために良民は飢えに泣き、また多くの生命が無残にも消されてゆく。このような有様をながめると、積尊当時となえられた思想が、単に思想に止らず、現代社会において現実に演じられているのではなからうかとさえ考えられる。

何故に現代人は倫理上このようななじめな姿をさらさなければならぬのであろうか。それは人間が人間を縛っているからである。その縛っているものは一体何か。それは地位であり、名誉であり、金銭であり、物財であり、女であり、酒であり、我利の心であり、すべて人間の欲望の対象となるものは私共を縛っているのだ。

しかし、欲望また欲望の渦巻く中にもがいている私共多くの人々も、遂には老境に入り、病氣を知り、そして死の近づくことをさとれば、おそらく、人間は如何に生くべきか、そしていかに死すべきか、すなわち生、老、病、死について真剣に思い至るのではないだろうか。あるいは現代人は、人間は悪業に悪果の報いなく、人間の肉体滅びて地水火風に還元されてそれで総て終りであると考え、多くの人が多いであらうか。私はこの現世において、多くの人々が両親や祖先の霊を供養する姿を見ているし、またその幸福をのぞんで目に見ることのできない、大いなる力に対して熱心に祈る姿を見ているのであるが、これらの人々は人間の永遠の生命を信じ、来世において光明に輝く安楽世界に往生することを心から願うものも多いと思うが、あやまりであらうか。

来世を夢みる人間が、来世に楽土に往生するための道程については仏教は私共に詳しい教えを示してくれている。そして例えば大乘の菩薩達が波羅蜜多の修業をするというのもその道程の一つであろう。しかし、高度の修業者ならば難行の多い、自力の道を歩んで目的地に至ることもできるであろうが、罪惡深重、煩惱熾盛の私共多くの一般衆生が救われるためには、このような道程では到底困難であって、私共にふさわしい教えのためにこそ浄土教が生れたのではないかと考えられる。

ところで、浄土教はインドにその発生の芽をみるが、仏教が中国に至って廬山の慧遠等が阿弥陀仏の浄土教発展の源を開いたといえよう。しかし慧遠等の浄土教は自力的、賢人的色彩が強かったが、これに対して浄土三部経により、他力を強く打ち出した曇鸞、これを受けついだ道綽、そして中国浄土教を大成せしめたのは唐の善導であった。わが国においても源信僧都など浄土教をひろめた名僧も多いが、鎌倉時代に法然上人が出るに及んで、善導の流れを汲んだすばらしい考え方が生れ、一切衆生を救済するという大乘仏教の大目的が実に果たされたのである。すなわち法然上人は「何もむづかしい修

業はいらない。いかなる人でも阿弥陀仏の、修業の結果成就した誓願を信じ、ただ一向に、南無阿弥陀仏と口称するだけで、死後阿弥陀浄土に往生することができのだ」と教えた。これを専修念仏といい、浄土教の頂点であると信じている。

さて、私共は死後果して浄土に往生しうるか、あるいはまた死して無に帰するかを問われれば、これは私共の認識能力の限界をこえた問題だと答えるしかないであろう。しかし煩惱の世界にくちゃくちゃにされ、疲れ切った私共の多くが、欲望の対象は結局は夢幻泡影と自覚して、阿弥陀仏を信じて念仏の善業を修し終るならば、その時こそ、この世において人と人との争いは消え、また国と国との恐るべきいがみ合いは絶滅することをかたく信じている。そして私は最後に、法然上人のよき継承者である親鸞聖人が、阿弥陀仏に対する信の行から、現世に生きる人間の心の中にも「極楽浄土」が建設されうると喝破した現生不退の思想をここに引用させていただいて本文の結びとしたい。



# 念佛ひじり三国志

(八十三)

—法然をめぐる人々—

## 寺内大吉

挿絵 松濤達文画

### 一

明遍が法然の身边に迫る魔の手を察知したのは、尊長僧都の動きからだけではなかった。

尊長は後鳥羽院政直属の思想警察官の立場にいた。彼自身の功名心からも「当世の寵児」法然を引きずりおろすことは、まことは時宜を得た戦術戦略であった。また後鳥羽院としても、法然の信表が多い鎌倉武士団や九条兼実一族へ権力を誇示する意味からも有効打と言わねば

ならない。

こうした政界上層部とは別に、南都北嶺という旧仏教教団の法然浄土教への反感も強かった。とりわけ僧尼令による教界の秩序を無視して勝手に僧侶づらをする私僧——念仏ひじりは有髪の尼たちが鼻持ちならなかった。さきの興福寺奏状に続いて、

——法然はあの折に提出した誓約（七箇条制誡）をいっこうに守ろうとはしない。邪法邪義の沙弥だ。という声も高まってきた。

光堂に住む明遍にこれらの情報は連日のように舞いこ

んでくるのである。情報の提供者は親戚筋の僧たちだった。

# 信西一族。

おびただしい数に達する少納言信西の子供たちが桑門へ入っている事実は、これまでにもしばしばふれた。年を経て、明遍自身の兄弟たちは殆んど老いたが、現在のその子供、つまり彼たちが重要な地位を占めていた。

その代表的存在が安居院の聖覚法印であり笠置の解脱房貞慶である。

貞慶と明遍がどこまで交流したかは不明だが、聖覚とは当時から足繁く訪ね合っている。興味深いのは、この建永時、明遍も聖覚も法然とは殆んど接触していない。

例えば聖覚法印。法然の四国流罪が決定した二月二十七日。聖覚は御説経所で釈迦四天画像供養の導師をつとめている事実が、藤原定家の「明月記」には記されている。

では法然が直面した「法難」をただ傍観しただけだったかと言えば、聖覚自身が筆執ったと伝えられる「十六門記」（黒谷源空上人伝）は、この事件を明確に、

——吹毛ノ讒言

ときめつけている。本質を透視しているのである。

明遍の周囲にはもう一人、有力な情報提供者がいた。

藤原長兼である。

彼もまた明遍とは腹違いの姉の息子にあたる。甥である。しかも「藏人頭」という後年における内務省の長官もどきのポストを占めていた。

覚明房長西と前後して光堂に明遍を訪ねてきた。

「この前の興福寺衆徒の騒ぎは、どうにかおさめたが、今度はかりはむずかしそうだ」

と、専修念仏教団の危機にふれてきた。

この前の……とは興福寺奏状のことであって、長兼は九条兼実を筆頭に法然の同情者の意見をかき集め、その擁護に奔走した。

「むずかしいとは？」

「何せ気まぐれでいらっしゃる院ご自身が、たいへんこの問題に興味を寄せられている」

「尊長らが煽動しておるのじゃろう」

明遍も眉をひそめた。

「それもある。だが困るのは、院が専修のひじりたちと鎌倉武家との関係を知ってしまったことだ」

＜法然上人の配流＞



「うむ……」

「軽いことでは済まされない」

「軽くないとは？」

「もはや門弟の処断なぞ重くみていない。法然御自身にねらいを定めている」

「やっぱり……」

明遍は、先日長西に託した法然への伝言が、「一時、都を離れたら」という忠告が立派に裏付けられたのを感じた。

「嵯峨の天狗に化けて、上皇が女のもとへかよわれた事件があったであらう」

「そんな噂も聞いた」

「あそこまで、ことをねじ曲げて押してくるお方です。思ひ立ったらどんなことでもやりぬく」

危機は刻々に法然の身边へ集中しつつあるのだった。

## 二二

藤原定家の日記「明月記」は建永二年（一二〇七）正月二十四日に次のような文章を挿入している。

——専修念仏ノ輩停止ノ事。重ネテ宣下スベシ云々。去ルコロ、イササカ事故アリト云々（ソノ事スデニ軽カラズ。又子細ヲ知ラズ。筆ヲ染ムルニ及バズ）  
この記述は同年の二月九日の文章へとつながってゆく。

——近日、只一向専修ノ沙汰。搦メ取ラレ、拷問サルト云々。筆端ノ及ブトコロニ非ズ

世にいう「建永の法難」である。後世の人は「松虫鈴虫事件」と呼んだ。

慈円の「愚管鈔」や法然の諸伝は、門弟の念仏ひじりのおこした風俗スキャンダルで総括し、法然もその責任をおおわされて讃岐へ流罪にされた、とする。

「愚管鈔」を引用すると、

建永ノ年法然房ト云上人アリキ。間近ク京中ヲ住所ニテ念仏宗ヲ立テ専宗念仏ト号シテ、タダ阿弥

陀仏トバカリ申スベキ也。ソレナラヌ事顯密ノ勤  
メ離セゾト云事ヲ云出シ不可思議ノ愚癡無智ノ尼  
入道ヲ悦バレテ、コノ事ノタダ繁昌ニ世ハ繁昌シ  
テ強クオコリツツ、ソノ中ニ安樂房トテ泰經入道  
ガモトニアリケル侍ノ入道シテ專修ノ行人トテ、  
又住蓮トガツイテ六時礼讃ハ善導和上ノ行也トテ  
コレヲ立テ、尼ドモニ婦依渴仰セラルル者出キニ  
ケリ。ソレラガアマリサエ云ハヤリテコノ行者ニ  
成リヌレバ、女犯ヲ好ムモ魚鳥ヲ食スモ阿弥陀仏  
ハ少シモ咎メ給ハズ、一向專修ニ入テ念仏バカリ  
ヲ信ジツレバ一定最後ニ迎エ給フゾ、ト云テ京田  
舎サナガラコノヨウニナリケルホドニ、院ノ小御  
所ノ女房、仁和寺ノ御室ノ御母混ジリニ是ヲ信ジ  
テ、密カニ安樂ナド云モノ呼ビヨセテ、コノヨウ  
説カセン聞カントシケレバ、又クシテ行向、同例  
夕出デキナントシテ、夜サエトドメナドスル事出  
デキタリケリ。トカク云バカリナクテ終ニ安樂住  
蓮頓斬ラレニケリ。法然上人流シテ京ノ中ニ在ル  
マジトテ追ハレニケリ

安樂や住蓮が、小御所の女房伊賀局、仁和寺御室の御  
母——坊門局らと六時礼讃の動行を機会に密通を楽しん  
だとする。このため二人のひじりは処刑され、法然も流  
罪となった、と書いている。

「法然上人行状画图」（四十八巻伝）は、

カクテ南都北嶺ノ訴訟次第ニトドマリ、專修念仏  
ノ興行無為ニ過グルトコロニ、翌年建永元年十二  
月九日、後鳥羽院、熊野山ノ臨幸アリキ。ソノコ  
ロ上人ノ門徒、住蓮安樂等ノトモガラ、東山鹿カ  
谷ニシテ別時念仏ヲハジメ六時礼讃ヲツトム。サ  
ダマレルフシ拍子ナク、オノオノ哀歎悲喜ノ音曲  
ヲナスサマ、誇ラシク尊カリケレバ、聴衆多ク集  
リテ発心スル人モアマタキコエシナカニ御所ノ御  
留守ノ女房出家ノ事アリケルホドニ、還幸ノノチ、  
悪シザマニ讒シ申ス人ヤアリケン。オオキニ逆鱗  
アリテ翌年建永二年二月九日、住蓮安樂ヲ庭上ニ  
召サレテ罪科セラルルトキ、安樂「見有修行起願  
毒、方便破壞競生怨、如此生盲聞提輩、毀滅頓教  
永沈淪、超過大地微塵劫未可得離三途舟」ノ文ヲ

誦シケルニ、逆鱗イヨイヨ熾リニシテ、官人秀能ヲ仰セテ六条川原ニシテ安楽ヲ死罪ニオコナワルルトキ……

さらに「第一図」の註として、

罪惡生死ノタグイ、愚痴暗鈍ノトモガラ、シカシナガラ上人ノ化導ニヨリテ、ヒトエニ弥陀ノ本願ヲタノムトコロニ天魔ヤキラヒケン。安楽死刑ニ及ビテ後モ逆鱗ナオヤマズシテ、カサネテ弟子ノ咎ヲ師匠ニ及バサレ度縁ヲ召シ、俗名ヲクダサレテ遠流ノ科ニ定メラル。藤井元彦云々

法然の流罪「宣下」を建永二年二月二十八日の日付と  
している。

「法然上人伝記」九巻伝は、

遂ニ上人ノ門弟等イカナル事カアリケン、咎ヲ本師ニ仰セテ遠流ニ処セラル

さらりと書き流す。

「拾遺古徳伝」になると、事件の性格に一步踏みこんで  
いる感だ。

ココニ太上天皇（後鳥羽院ト号ス）今上（土御門院ト号ス）聖曆承元（建永二年）仲春上旬ノコロ、南北ノ学徒、顯密ノ棟梁、浄土ノ一門弘興、聖道ノ諸宗廃滅ノ因縁、コノ事ニアリ。スベカラクソノ根本ニ付テ空聖人（法然）ヲ坐スベシトイフコトヲ僉議シツツ奏聞ニ及ブ。ソノ上門弟ノ中ニ不慮ノ無実、内々ソノ聞アリケレバ事ノ計会折フシ惡シクテ、南北ノ学徒ノ奏事左右ナク勅許。スデニ罪名ノ議定ニ及ンデ、ハヤク遠流ノ勅宣ヲ下サレケリ。聖人ノ罪名藤井元彦、男。配所土佐国。春秋七十五。コノホカ門徒、或イハ死罪、或ノハ流罪。流罪ノ人々浄聞房（備後国）禅光房（伯耆国）好寛房（伊豆国）法本房（佐渡国）成寛房（阿波国）善信房（越後国）善恵房（無動寺前大僧正被申預之）已上流罪師弟共八人。善綽房西意（撰津ニ於テ誅。佐々木判官沙汰）性願房、住蓮房、安楽房（已上、近江国

馬淵ニ於テ誅。二位法印尊長ノ沙汰云々。己上死罪四人。コノ人々誅セラルトキ面々ニ不可思議ノ奇端ヲアラワス。或ハ流レイズル所ノ血ヨリ青蓮華出生ス。或ハ頸落チテ後、合掌ヲ改メテ念誦ヲクルコト百八ノ念誦ヲモテ三反ノ云々。或ハ落ツル所ノ頸、高声念仏十余遍、コレヲ唱フ。或ハ口ヨリ蓮華出生ス。種々奇特ノ事ナドアリケリトナン

「法然上人伝」(十巻伝)は「住蓮安樂被行斬刑事」として、

太上天皇、以ニ熊野參詣之隙、小御所女房達招ニ請住蓮安樂等、為ニ念仏聴聞、還御之後、被ニ聞ニ食此由、甚以有ニ逆鱗、自此以後念仏者気色、背ニ袈裟ニ畢。就ニ中住蓮安樂、上人門弟中随分上足弟子也。於ニ其身、令無過無犯処、有ニ誹謗之輩ニ致ニ無実譏奏ニ故、忽蒙ニ刺勘。被ニ召籠ニ之条、是偏倭臣誤レ君如シ浮雲蔽ニ白日

住蓮、安樂らの冤罪を強調する。

さてこれらの記述が今日にいたわる「建永の法難」の外容、骨格をなしたものであるが、事件の性格を浮き彫りにさせる資料としては、きわめて薄弱と言わねばならない。

記述は簡略だが、藤原定家が書きのこした「明月記」の文章に、時日の経過と生きた資料の信憑性が強く裏書きされている。

つまり、建永二年の正月二十四日のころ、すでに殿上人定家の情報網は「専修念仏の徒輩停止の事」が、ある事件(事故)によってキャッチされており、二月九日には何人かが逮捕されて拷問を受けている事実が明らかなのである。

事件——事故とは恐らく鹿カ谷における六時礼讃、これにともなう御所の女房たちの「出家」であろう。では念仏ひじりたちを逮捕して、何を目的として口を割らせるべく「拷問」したのであろうか。

ここで事件の背景をなす資料を少し洗い出してみる必要がある。

「四十八巻伝」三十三巻に、流罪が決定したときの法然の態度を紹介している。

法然は語った。

コノ法（念仏義）ノ弘通ハ、人ハトドメムトストモ  
法サラニトドマルベカラズ。諸仏濟度ノ誓イ深ク、  
冥衆護持ノ約ネンゴロナリ。シカレバ何ゾ世間ノ  
機嫌ヲハバカリテ經釈ノ素意ヲカクスベキヤ

法然の門弟たちの中で、専修念仏の教線を変更して、  
この国の法（神祇神道思想）や世間の常識と融合していっ  
たらどうか、と提唱した者がいたらしい。法然はきびし  
くこれをしりぞけたのである。

さらに、

御弟子西阿弥陀仏推参シテ、カクノゴトクノ御  
義、ユメユメ有ベカラズ候。オノオノ御返事ヲ申  
シ給フベカラズト申シケレバ、上人ノタマワク。  
汝經釈ノ文ヲ見ズヤト。西阿申サク、經釈ノ文ハ  
然リトイエドモ世間ノ機嫌ヲ存ズルベカリナリト。  
上人又ノタマワク、我レタトヒ死刑ヲオコナハル  
トモ、コノ事言ハズバアルベカラズト至誠ノイロ

モトモ切ナリ。見タテマツル人、ミナ涙ヲ落シ  
ケル

西阿弥陀仏——西阿は毛利ノ入道。この人は藏人大夫  
と別して鎌倉將軍家の近臣だったと註されている。六波  
羅に在勤していて法然の教化を受け、念仏ひじりとなっ  
た。

西阿はさらに強く法然に妥協を求め、鎌倉からの政治  
介入をほのめかしたとも思われる。しかし法然は断固と  
してハネつけ「たとえ死刑になっても」とその宗教的純  
潔をつらぬくのであった。

### 三

慈円は九条兼実の実弟である。「愚管抄」は史書とし  
て、著者が廟堂の枢機を覗き得る立場にあっただけに高  
く評価されている。ましてこの時期、慈円は歌所を通じ  
て後鳥羽院と親しかった。法然とも、その晩年弟子の証  
空（西山上人）が臨終の善知識をつとめたりして深くわか  
わっていたはずなのだが、「愚管抄」の文章はひどく冷

めたい。

法然の流罪について、

法然上人流シテ京ノ中ニ在ルマジトテ逐レニケリ。  
カカル事モカヨウニ御沙汰ノアルニ少シカカリテ  
控エラルトコソミニレ。サレド法然ハアマリ方人  
ナクテ許サレテ終ニ大谷ト云フ東山ニテ入滅シテ  
ケリ

法然の追放流罪はまことに適切な処置だったのだが、  
法然を支持する人々が宮廷周辺にもいて、手心を加える  
ように謀ったらしい。じきに赦免されて東山大谷で入滅  
した、と書く。

追放流罪を適切とする慈円の底意に、永久追放ないし  
死の断罪を願う気分がこもってはいなかったであろう  
か。

慈円は比叡山で天台座主をつとめ、旧仏教を全面否認  
する法然を許しがたく思うのは当然だ。まして嘉禄元年  
(一二二五)に寂した慈円は、法然の歴史的価値なぞ透視  
し得なかったであろう。また、彼に接近した法然の「旧

門弟」たちにしても、法然の存在を否定することで慈円  
側近のポストを強化した痕跡も歴然としている。

もしかすると慈円は、ラジカルな専修の徒を追放して  
天台系の念仏教団を確立して、その総帥に君臨する意図  
があったかもしれない。

それと、後鳥羽院との関係がこの一兩年来とりわけ濃  
密になっていた事実も見逃すわけにはいかない。

歌所の同志であることは、すでにふれた。二年前の元  
久二年三月には慈円自身も「新古今集」に撰進されてい  
る。しかも歌道の天才とうたわれた摂政の九条良経（兼  
実の子）が怪死をとげたのが、つい昨春のことだ。甥で  
はあるが、歌の道でのライバルでもあった。

良経怪死の真相は、謎の雲におおわれたままだが、こ  
の前後から慈円と後鳥羽院との仲は蜜月を思わせるもの  
がある。「新古今集」の撰進もひとえに後鳥羽院の推挙に  
よる。「近き世にとりては大炊御門前斎院（式子内親王）  
故中御門摂政（良経）吉水大僧正（慈円）これら殊勝也……  
大僧正おはやうは西行がふりなり。すぐれた歌はいずれ  
の上手にも劣らず、むねと珍らしき様を好まれる」と後  
鳥羽院は後の「御口伝」で激賞している。

後鳥羽院との蜜月時代の頂点で慈円は「建永の法難」を叙述している。これが「愚管鈔」の特色でもあるが、現在の著書と異なり必ずしも統一した見解テーマに固執しない点がある。あれほど讀えた後鳥羽院を巻末では鋭く批判するのである。まるで他人の筆になった観すらある。

法然教団への痛罵は当然であろう。

ちなみに兄九条兼実の死にふれた慈円の文章にも暖か味はとほしい。

サテ九条殿ハ念仏ノ事ヲ法然上人ススメ申シラバ、  
信ジテ、ソレヲ戒師ニテ出家ナドセラレニシカバ、  
仲国ガ妻ノ事アサマシカリ。法然ノ事ナド嘆キテ  
ソノ建永二年ノ四月五日、久シク病ニ寝テ起居モ  
心ニカナハズ臨終ハ良クテウセニケリ

九条兼実は法然が都を追放された直後の四月五日に世を去るのであるが、慈円はこの実兄に「臨終ハ良クテ」と聖道僧としてのわずかな「救い」を授与している。というわけはこの前段の文章で、法然の入滅（建暦二年正月

二十五日）に、日常極楽往生を主唱していた僧のくせに何ら「往生の証固」はなかった、と強調したからである。つまりその法然の入滅との対比において兄の兼実を「臨終ハ良クテ」と救ったようである。

ただし聖道門の往生と法然が主唱する他力門のそれが全く「質」を異にしていることを慈円は気づかぬし、知ろうとしなかった。阿弥陀仏の来迎をうける他力者に何の奇瑞、奇蹟が必要であらうか。

ところで今引用した「愚管鈔」の文章に重要な一行がある。

——仲国ガ妻ノ事アサマシカリケリ

仲国とは誰のことであるか。その妻に何がおこって、九条兼実はどうかわったのであろうか。

慈円は「愚管鈔」で法然を悪しざまに罵る前段で、じつはこの「仲国事件」について多くの紙頁を費している。つまりこの事実を通過しなければ、慈円の法然への態度も、また後鳥羽院をとり巻く追隨者たちの視点も理解できない、ということになる。

仲国事件は、その前ぶれを建久七年（一二九六）に発している。

二位入道公時に仕えた者で橘兼中という男がいた。彼の妻にその四年前に崩御した後白河法皇の怨霊が取り憑いたのである。

妻は法皇の口ぶりで、  
「われを篤く祀って、社をつくれ。わが領地（長溝堂領）をその社に寄進せよ」  
と言いまくった。

法皇の愛人だった浄土寺二位丹後局（高階栄子）はこの問題を宮廷へ持ちこんだ。

評議がかさねられた末、兼中夫婦はただの「狂乱」ということで結着がつき、彼らは流罪された。

ところが建永元年（一二〇六）になって源仲国という法師の妻に再び後白河法皇の怨霊が取り憑いたのである。

仲国は故法皇に仕えた北面の武士であった。当然、法皇の旧領地を後鳥羽院側近が勝手に分配し合っている事実を知っていた。その妻の「妖言」も凶星をさしつらぬく点が多々あった。

処置に窮した後鳥羽院は、慈円に相談する。慈円は断固として「妖言」を退け、ただの「狐憑き」であるから処分されるがよろしいでしょう、と献言した。

後鳥羽院は心安んじて仲国夫婦を摂津国の山寺へ押しこめたのだった。

このあたりを書く慈円「愚管抄」の筆は得々としており、われとわが身を「僧正」と第三者的に呼んでいる。後鳥羽院政へ大きなメリットを与えたという自覚があったのであろう。

ただし、得意満面の文体には弁明がましい弱い部分もふくんでいる。例えば仲国事件の書き起こしは「カカリケルホドニ院ニハモトヨリ失ハヌル摂政ノ事深クシノビ思召シケレバ、家実摂政ニナリテ左大将空キケル所ニ中納言中将道家ヲバ左大将ニナサレニケリ」などと事件とは表面、無関係な記述を挿入している。

事件発生は建永元年の六月だが、その三月に摂政の九条良経が怪死を遂げている。良経が死んで空位になった摂政に、兼実の兄基実の孫家実を推挙し、彼がいた左大将のポストに良経の遺児道家を振りあてたのである。

道家は未だ十四才、宮中序列からも当然の進叙だが、

「摂政ノコト深クシノビ」はいかにも押しつけがましく、良経の怪死に嫌な臭気すら感じさせる。

それはともかく、この仲国と安楽房遵西は後白河法皇のもとで同僚であった。「梁塵秘抄」などでもわかるように法皇は歌舞音曲——今様を愛した。だから建久三年三月法皇が崩御したその秋、大和入道見仏という法皇の遺臣は、安楽、住蓮ともども八坂の引導寺で法皇をしのぶ音曲法要——六時礼讃をいとなんでいるのである。

これが六時礼讃の最初だった、とも諸伝は記している。

さらに「四十八巻伝」は元久元年（一一〇四）三月、蓮華王院で後白河法皇十三回忌もつとめている。導師は法然であった。浄土の三部経を写経し、六時礼讃もねんごろに誦したとある。

仲国の妻に法皇の怨霊が乗りうつる一年前のことだ。

いや、後鳥羽院政にとって専修念仏者たちによる六時礼讃の合唱は、そのまま後白河法皇の「うらみブシ」にひびいてきたのではなからうか。その「うらみブシ」が洛中に満ち満ちて、しかも院内の女房たちまでさえこの

合唱練習に参加するに至っては、その覆滅を企図したくなかったのは自然の成りゆきであったかもしれない。

九条兼実がわが子良経の死をめぐる陰謀や謎を疑ぐつていたであらうか。彼が病みついた直接原因もそこらあたりにひそむ、とみたい。となれば現後鳥羽体制に恨らみつらみをぶつつける仲国法師の妻の「妖言」にも支持を与えた可能性は充分に考えられる。

だからこそ慈円の筆は「仲国が妻ノコト、アサマシカリ」だったであらう。

(つづく)

『浄土』誌の購読希望者のご紹介を、広くお願い申し上げます。いよいよ今月号より、年会費誌代を三〇〇〇円に値上げいたしました。お見限りになることなく、どうぞ末永く宜しくお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

## 二 編集後記 二

○すでお知らせいたしましたように、今月より郵便料金の値上がり等の諸般の事情から、法然上人讃仰会の年会費をやむをえず値上げさせていただくことになりました。本文四十八ページの小冊子『浄土』誌を一年間購読する代金として、三〇〇〇円

ございます。と共に、今は、会員諸兄よりのこれまでもましてのご後援を重ねてお願いいたし、明日の『浄土』への明かるい夢と希望をつなごうという一杯です。ともかく私自身も、改めて、責任の重いことを痛感しております。

ということは、いささか高価ではあります。しかしどうか、会員諸兄の暖かいご配慮をいただきまして、今後共弊会への一層のご支援をお願いする次第です。まことに不安この上ない限りの法然上人讃仰運動実践の現状です。日頃より、お叱りや励ましのお便り等を実際に目を通してながら、反省の念及び感謝の思いをひとしお銘記しながら、平常の事務処理や『浄土』誌の編集作業にも色々誤まりの多いこと、まことにもって後悔されることであります。現場をあずかせていただいておりますものとして、ただただ心よりお詫びするばかりでござ

います。『浄土』正月号より三回に渡って、「アソコール・ワットSOS」というきわめて有益なご連絡をいただいた、鹿児島大学教授石沢良昭先生は、フランス史学の手法をより所としながら、東南アジアの歴史学を専攻される、この分野では世評高く、しかも貴重な学人である。動揺するカンボジア情勢の中で、ひたすら歴史的遺産の保護と伝承に現地の人々と共に多大な努力を払っておられるのである。その成果の一端を、本誌にわかりやすく寄稿していただいたのが先の連載であったが、なお、誌面を改めて、その後の続報といったような内容で、東南アジア仏教史を総括していただく予定である。

(原 裕)

### 「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十七巻 四月号

昭和十年五月二日  
第三種郵便物認可

昭和五十六年 三月二十五日 印刷  
昭和五十六年 四月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦  
発行人 佐藤 密雄  
印刷人 関 二三男  
印刷所 長谷川印刷錦

東京都千代田区飯田橋一―一六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番  
〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

＝最新刊＝

ブッダの生涯と古代インド仏教世界を現地網羅取材

『ブ ッ ダ の 世 界』

—The World of Buddha—

東大名譽教授 中 村 元

駒沢大教授 奈良 康 明 編 著

大正大助教授 佐 藤 良 純

＝写真撮影 丸 山 勇＝

◎仏教学・考古学・インド学の最新学問研究と、現地国考古学局の  
学術協力のもと一年半の現地撮影取材とによって成った、わが国  
で画期的な国際大型出版。

インド亜大陸未踏の領域に入って精密に把えた900点のカラー・  
モノクロ写真を駆使し、釈尊の生涯と古代インド仏教の歴史を、  
学界権威が900枚に論述。

最大規模の取材と最高水準の調査研究を集大成した記念碑的図  
説インド仏教文化史。

B4変型判 上製クロス装 美麗貼函入 5色刷カバー付  
カラー写真212頁 本文一色204頁 全416頁  
現金定価 32,000円

発 行 学 習 研 究 社 〒145

東京都大田区上池台4-40-5

TEL 03(720)1111内線2737